

作 齋藤 憐

演出 佐藤 信・真鍋卓嗣

春、忍び難きを

敗戦後の信州・松本の庄屋一家
平凡な山里の暮らしが
根こそぎ変わる一年
田舎に残る者、都会に出て行く者
七十年後の私達に
今生きている原点を振り返らせる



画・早野進

戦後70余年を迎える今、
もう一度この作品を通して日本のあり様を考えてみたい。
社会の変化におびえるあの時代の男たち、
そんな男たちをしり目に、女たちは黙々と農作業に従事していた。

紀伊國屋・鶴屋南北ダブル受賞の齋藤憐が、最高のスタッフ・キャストで
新劇の真髄に迫る――。

演劇鑑賞会☆松江市民劇場

7月9日(日)15:30開演 観劇は感激!

会場：島根県民会館 大ホール 後援：松江市教育委員会

●入会と観劇のお問い合わせは…松江市民劇場事務局 / TEL 0852(26)3094
※入会時 4,600円 (入会金 2,300円 + 月会費 2,300円)



夫と息子と農耕馬を戦に取られた村では、女たちが日本中の食卓を支えていた。
 昭和二十年、敗戦の年の十二月。この年は、半世紀に一度の大凶作だった。
 信州、松本近郊の里山辺の丘陵地にある庄屋・望月多聞は
 この地の村長であり、名士であった。
 敗戦、食糧難などの事情で望月家の子供たちやその家族が帰郷してくる。
 しかし望月家の跡継ぎである次男・二郎はまだ戦地から帰還していない。
 やがて農地改革の波がこの地にも押し寄せてきた。
 農地改革や教職追放などでおびえる男たち。
 女たちはそんな男たちをしり目に黙々と農作業に精を出して、働いていた。
 一年が過ぎて、食料を目当てに帰郷した子供と家族たちは、
 村を去り季節のない都会へ帰っていき、戦後が始まったが…

作 齋藤 憐

演出 佐藤 信・眞鍋卓嗣

春 忍び 難きを



小笠原良知



河原崎次郎



加藤佳男



森 一



関口晴雄



志村史人



斉藤 淳



脇田康弘

美術 佐藤 信
 照明 黒尾芳昭
 効果 田村 憲
 衣裳 若生 昌
 映像 吉本直紀
 舞台監督 関裕麻
 制作 山崎菊雄



川口敦子



美苗



早野ゆかり



井上 薫



森根三和



観劇の感想より

○土地とともに生きる農民の姿、特に「家」を支えた女性の強さと優しさが描かれている。

○食へ物はお金さえ出せば手に入るものと思い、目の前の食べ物に感謝したことはあっても、作ってくれた人に感謝したことがあっただろうか。

「都会じゃ誰が作ったかなんて思いもしない」というセリフにグサツときた。

○戦争を経験し、大変な時代を力強く生きた女性の姿を見せていただきました。ほんとに、女性は賢くこの世をしっかり見据えていなければいけないと思います。

●見所

この作品では、せりふとして語られる信州・松本の方言が、野麦峠を越える北アルプスや美ヶ原などの気候風土も描き出しています。また、舞台上の囲炉裏のある板敷きのオエ、ニワと呼ばれる土間など農家の暮らしが懐かしく再現されています。